

具平親王「ゆきげのやま」詠についての考察

島田 遼*

要 旨

具平親王は十世紀後半から十一世紀初頭を生きた人物である。九六四年、村上天皇第七皇子として生まれ、一〇〇九年に没した。中務卿となったため、後中書王とも呼ばれる。詩歌管絃に優れた当代随一の博学の人であった。具平親王の私家集は散佚しており教葉の古筆断簡が伝わるのみである。本稿ではその古筆断簡の内、「わたつみはゆきげのやまぞまさるらしおちのしまぐみえずなりゆく」という歌一首を検討する。この歌は田中親美旧蔵の断簡であり『私家集大成』にも収録されている。しかし現在その所在は不明である。図版も伝わっていない点が残念であるが、歌の解釈を通して具平親王の和歌研究の一助としたい。具平親王における滑稽な詠みぶり、私家集ならではの日常の歌を検討する。また平安中期和歌における『万葉集』の受容という点を今後の課題として提示した。

目 次

はじめに

一 「ゆきげのやま」詠について

二 雪の山

三 雪の山と洲浜と島

はじめに

四 「ゆきげのやまぞまさるらし」という表現について
五 一首の解釈
おわりに

具平親王は十世紀後半から十一世紀初頭を生きた人物である。応和四年（九六四）村上天皇第七皇子として生まれ、寛弘六年（一〇〇九）に没した。兼明親王の死去に伴い中務卿となったため、前中書王（兼明親王）に対して後中書王とも呼ばれる。詩歌管絃に優れた当代随一の博学の人であった。本稿ではその具平親王の歌を検討する。具平親王の私家集は散佚しており教葉の古筆断簡が伝わるのみである。寂然筆であるこれらの断簡は、かつては寂然自身の家集と考えられていた。しかし萩谷朴氏の報告^{〔1〕}により、これらは寂然筆『具平親王集』の断簡であることが明らかとなった。近年新たなツレの存在が何点か報告されている。具平親王の歌に注釈を加え厳密に読み解くことよって、具平親王の和歌史上の位置付け、和歌の特徴の定位を試みたい。具平親王における滑稽みを帯びた詠みぶり、また風雅な遊びの中で詠まれる歌、サロン文化の中の歌という点についても論じたい。

本稿で取り上げる歌は田中親美旧蔵の断簡に書かれている歌であり、『私家集大成』にも収録されている。しかし現在その所在は不明である。前掲萩谷論文により本稿で論じる歌の断簡部分を、字配りを再現した翻刻として掲げる。⁽³⁾

丙 (田中家蔵残卷)

(F)

<p>くれがたに なりければ やうくとけてしまも みえずなりければ 人ぐのよみ けるに</p>	<p>わたつみは ゆきげのやまぞ</p>
---	--------------------------

(以上第二葉)

(以上第三葉)

(田中家蔵残卷)と分類した内の第二葉、第三葉を検討する。(F)の歌である。

一 「ゆきげのやま」詠(こころ)

はじめに紹介した田中親美の蔵していた断簡二葉について、以下歌の内容を検討してゆく。まず『新編私家集大成』⁽⁵⁾による本文を掲げる。

くれかたになりければ、やうくとけて、しまもみえずなりければ、人ぐのよみけるに
わたつみはゆきげのやまぞ「まさるらし おちのしまぐみえずなりゆく(六)
あなみくるしく、これをも」

便宜の為、最低限の濁点を施した釈文も掲げる。以下この本文によつて進める。

くれかたになりければ、やうくとけて、しまもみえずなりければ、人ぐのよみけるに
わたつみはゆきげのやまぞまさるらし おちのしまぐみえずなりゆく
あなみくるしく、これをも

萩谷氏も指摘されている通り、この歌は小異はあるが『拾遺和歌集』⁽⁶⁾に採られている。

雪をしまじまのかたにつくりて見侍りけるに、やうやうきえ侍りければ
中務のみこ

以上の二葉の他に萩谷氏は、田中親美旧蔵の断簡四葉、加藤正治旧蔵の古筆切を収録した複製手鑑「養老集」に捺されている断簡一葉、酒井宇吉蔵の断簡一葉を紹介している。⁽⁴⁾本稿では萩谷氏が「丙

わたつみもゆきげの水はまさりけりをちのしまじま見えすなり
ゆく

もとゆひにふりそふ雪のしづくには枕のしたに浪ぞたちける

(巻第十七・雑秋・一一五二、一一五三)

共に採られている『拾遺集』一一五三番歌は「養老集」所収の断簡〔『古筆学大成』⁷⁾にも収められている〕である。詞書の異同と、初句「わたつみは」が「わたつみも」に、二句「ゆきげのやま」が「ゆきげの水」になっているという異同が確認できる。断簡の本文と異同があるがこの歌は同一のものであると言えるだろう。『拾遺集』によって、田中親美蔵の第二葉・第三葉は一続きの断簡であることが確認できる。

ところで雪が詠まれている冬の歌であるのになぜ『拾遺集』では「雑秋」という部立に収められているのであろうか。「雑秋」の部は「屏風に七月七日」の詞書を持つ七夕歌「たなはたはそらにしるらんさがにのいとかくばかりまつる心を」(一〇八二・源順)から始まる。その後は秋の歌が続き、一一三七番歌に至って十月つまり冬の歌に移るのである。

十月ついたちの日、殿上のをのこどもさがのにまかりて侍
るともによばれて 清原元輔

秋もまだとほくもあらぬにいかで猶たちかへれともつげにやら
まし (一一三七)

この後も冬の景物が続き、具平親王歌の前に置かれる歌も紀貫之の「ひとりねはくるしき物とこりよとや旅なる夜しも雪のふるらん」(一一五一)と雪を詠んだ歌である。そして「雑秋」は歳暮の歌で閉じられるのである。つまり『拾遺集』「雑秋」に採られている具

平親王歌は秋の歌ではなく冬の歌なのである。「雑秋」の内、冬の歌は一一三七番から一一五八番までである。配列から考えて具平親王の一一五二番歌は十二月の歌として『拾遺集』に採られたのではないだろうか。⁸⁾

次に具平親王集切の詞書を検討してみよう。「くれがたになりければ」は、夕方になったので、と理解できる。問題は「やうく」とけて、しまもみえずなりければ」である。何がとけたのであろうか。まず思い浮かべるのは雪や、氷であろう。この点は『拾遺集』の詞書を見ればはっきりする。「雪をしまじまのかたにつく」⁹⁾だったのである。その「しまじま」がとけてゆく際に詠まれた歌だと理解できる。では雪で作られた「しま(しまじま)」とはどのようなものだったのだろうか。

二 雪の山

平安時代中期に雪で山を作る遊びが宮中で流行したことが知られる。その様子が詳細に書き留められている『枕草子』⁹⁾の記述を見よう。

師走^{しはす}の十余日^{よひ}のほどに、雪いみじう降りたるを、女官どもなどして、縁^{えだ}にいとおほく置くを、「同じくは、庭にまことの山を作らせはべらむ」とて、侍召^{まじらひ}して、仰せ言^{おほし}にて言へば、あつまりて作る。主殿^{とのちり}の官人の、御きよめにまゐりたるなども、みな寄りて、いと高う作りなす。官司^{みやづかみ}などもまゐりあつまりて、言加へ興ず。三四人まゐりつる主殿寮^{とのちり}の者ども、二十人ばかりになりけり。里なる侍召^{まじらひ}しにつかはしなごす。「今日^{けふ}この山作る人には日三日給^たふべし。またまゐらざらむ者は、また同じ数とどめむ」など言へば、聞きつけたるは、まどひまゐるもあり。里遠きはえ告げやらず。

この記事によると十二月中旬、雪がたくさん降ったので庭に雪の山を作らせたようである。その雪の山作りのため侍たちを召した。その後、作られた雪の山がいつまで残るだろうか、中宮定子と清少納言などの女房達は予想し合っている。この章段には雪の山を眺めて歌を詠み合う、という描写は見られないが、おそらく女房達は歌を詠み合うということもしていたのであろう。歌だけでなく雪の山そのものがどうなるかということも含めて遊びに興じていたのである。また続く部分には雪の山を作った日に式部丞源忠隆がやって来て「今日雪の山作らせたまはぬ所なむなき。御前の壺にも作らせたまへり。春宮にも、弘徽殿にも作られたり。京極殿にも作らせたまへりけり」と語っている。当時雪の山の遊びが流行していたことがわかるだろう。当時の貴族、文化人たちにとって大雪が降ったならば雪の山作りに興じるということは、当たり前のことだったのである。

『枕草子』より前の時代はどうだったのだろうか。『河海抄』巻第九「權」の古注によると、村上天皇の応和三年（九六三）閏十二月に雪の山を作らせたという記事が見える¹⁰。

ゆきまろはしさせ給ふ

雪団 応和三年閏十二月廿日、右衛門志飛鳥部常則をして雪を堆みて蓬萊山を女房の小庭に作らしむ。今日功了す。常則及び画所雑色役の者三人、祿を賜る。差有り。（原漢文）

絵師である飛鳥部常則、また画所の雑色の者達に女房の小庭に雪の山を作らせたようである。『枕草子』の記事と同じく、雪の山作りに携わった者に祿を賜ったようである。ここで雪の山が作られた場所は「女房の小庭」であった。天皇、女房たちなど集団で雪の山を楽しんだのであろう。

具平親王と同時代、また後代の公家日記も確認しておこう。藤原実資の『小右記』永観三年（寛和元年、九八五）正月の記事にも雪の山の記述が見える¹¹。

十日乙卯、参内す。弘徽殿に御す。小弓の事有り。兼日前後の方を取り分けらる。召に依り参入す。弘徽殿の東廂、此の事有り。前勝ちて三度止む。中清朝臣龍王を舞ふ。勝負楽有り。楽所並び侍臣等相交はる。事了りて本殿に還御す。後涼殿の前の南壺において忽ち雪山を作らる。其の壺の南方に台盤並びに草整等立てたり。伶人、楽人祇候す。各皆靴、深履等を着す。後涼殿の東庇に班幔を懸く。惟成朝臣題を献じて云く、「春雪を賀す」、「春雪瑞を呈す」なれば、「春雪瑞を呈す」を以て題と爲す。「新」を以て韻を爲せば、糸竹音を合はせ間に朗詠を奏す。寅時許り詩を献じ、文台に置く。七言四韻。惟成を以て講師と爲す。下官読師役を奉仕す。詩を講じ了りて各退出す。

（中略）

雪高さ五寸許り、青宮、作物所等、御卯杖を献す。（原漢文）

花山天皇が後涼殿の南の庭に雪の山を作らせ、台盤や草整（腰掛け）などを設けて詩や楽の遊びを催したようである。「春雪瑞を呈す」題の七言四韻の詩が楽に合わせて朗詠された。藤原惟成が講師を勤めたと書かれているので、詩合であったかもしれない。詩でも歌でも楽でも、雪の山の遊びは集団で興じるものであったと言えるだろう。

また具平親王より時代は下るが、藤原宗忠の『中右記』嘉保二年（一〇九五）十一月の記事にも雪の山の記述が見える¹²。

白雪高く積もりて已に七八寸に及ぶ。仍て未明に参内す。主

上、西の釣殿に渡御し、池辺の雪を御覧す。又仰せ有りて、南殿の北壺に雪山を作らしむ。高さ北簷に及ぶ。(原漢文)

雪が七八寸降り積もったので、堀河天皇が南殿の北の壺に雪の山を作らせたようである。その高さは北の軒まで届く高さだったようである。雪の山のより正確な高さ・大きさについては、後代になるが藤原頼長の『台記』久安二年(一一四六)十二月廿一日条に記述が見える。¹³⁾

(前略) 戌の刻、雪の山の功終んぬ。東西一丈五尺、南北一丈二尺七寸、高一丈八尺二寸。(原漢文)

この記事によると雪の山は、縦横約四・五メートル×約三・八メートル、高さは約五・四メートルにも及ぶものであったらしい。前掲『枕草子』の続く部分にも乞食の女法師「常陸の介」が雪の山に登る、という記述が見られるのでやはりそれなりの大きさだったであろう。

ではこの雪の山の行事は和歌ではどのように詠まれているのだろうか。まずは具平親王と同時代人である藤原公任の歌を見てみよう。『公任集』に次のような歌が載る。

二月に雪のいと高う降りたるに、行資が曹司の前に雪の山をいと高うつくりて煙をたてたるに、雪のなほいたう降れば唐傘をさしおほひてたてたりければ
あづまぢのふじのたかねにあらねどもみかさの山もけぶり立ち
けり
(二二七)

返し、兼澄がむすめ、春日祭の日になんありける
みかさ山煙のそらにみゆなるは春日ののべをけふやくくらん

(二二八)

二月に雪が高く降り積もり、橘行資の曹司の前の庭に雪の山を作ったようである。行資は頂上に香炉を置き煙を立たせ、さらに雪がたくさん降っていたため、香炉の火が消えないように雪の山に唐傘を挿した。その趣向を汲み取り、公任が雪の山を富士山に見立て、また香炉の煙を噴煙に見立てて歌を詠んだ。唐傘が挿してあったことから「御傘山」と奈良の「三笠山」を掛けている。兼澄女は返歌として三笠山の麓にある春日神社の野焼の煙に見立てている。このように公任周辺では手の込んだ雪の山の遊びがなされたようである。また『公任集』には、同じ時の歌であろう、以下のような歌のやりとりも遺っている。

行資が曹司に雪の山をつくりたるに、物に書きてささせた
まひける

音にきくこしの白山しら雪のふりつもりての事にぞ有りける

(二七八)

返しに、兼澄が女

降りつもる雪とのみ見る白山のけふはかひある心地こそすれ

(二七九)

久しう里なるころ、雪の山つくり給うたりと聞きてたてまつりける

おぼつかな今も昔もおとにただなをのみぞ聞く越の白山

(二八〇)

返し

白山をよそに思はばわがやどを今はこしとや思ひ成りぬる

(二八一)

一七八番歌の詞書に「物に書きてささせたまひける」とあることから、歌を何かに書き付けてそれを雪の山に飾る（さす）ことがなされたようである。また一八〇番歌の詞書に「雪の山つくり給うたりと聞きてたてまつりける」とあることから、庭に雪の山を作る遊びは規模も大きく、「久しう里なる」者の耳にも入るほどに噂が流れていたようである。

具平親王と親しく、柿本人麻呂・紀貫之、どちらが優れた歌人であるかを優劣論を繰り広げた公任の周辺でも雪の山の遊びが催されていた。しかしこれは具平親王と公任との間での流行ということではなく、前掲諸資料からもわかる通り当時の貴族、知識人達の中の流行であった。

また公任の従兄弟にあたる大式（藤原）高遠にも雪の山の歌が残されている。

雪山をつくりて、梅のつくり枝をうゑて、人人の歌などよむに

みやまぎにかかれるゆきははななれやむめとはかにぞわくべかりける
（大式高遠集・一〇九）

これは次節で取り上げる大伴家持の「雪嶋」歌が詠まれた状況と非常によく似ている。雪の山を作り、梅の造花を挿し植えて歌を詠み合ったのである。雪の山に植えられた枝にかかるものは雪なのか、白梅の花なのか。香によつてそれが梅の花だとわかった、という歌である。

「雪の山」の遊びは、公家日記で確かめたように後代も享受されていた。いくつか歌を見ておこう。

和歌六人党の一人、藤原範永も後冷泉天皇の雪の御遊びの際、歌を代作している。

正月十日のほどに、御前に雪山をつくりて、藏人良綱、歌つかうまつれとおほせられければ

ふりつもるゆきの山とはなりぬともはなとやみらむはるしきぬれば
（範永集・一八一）

「藏人良綱」は範永の息子である。後冷泉天皇の仰せに対して息子に替つて歌を詠んでいる。白い雪の山を「はなとやみらむ」、花とみるでしょうか、と雪を花に見立てている。

また和歌六人党と関係のある橘為仲にも四条宮下野との短連歌の掛け合いが残っている。

雪のあした、宮の御前に、人人して雪山つくらせ給ふに、
火焚屋のうへなる雪をみて、下野の君の言ひ出したりし
いかでかつもるひたきやのゆき
本つけし

けさみればかまどの山もかくやあらむ
（為仲集・八〇）

衛士の詰め所である火焚屋に積もった雪を見て四条宮下野が末の句を詠み、それに対して為仲が竈山（太宰府の宝満山）も今朝見ればこのように雪が積もっていることでしょう、と本の句を付けている。火焚屋に対して竈山を持ち出す、機転の利いた掛け合いと言えるだろう。

同じく和歌六人党の平棟仲、その娘の周防内侍にも雪の山の遊び、またそれに伴う詠歌が残されている。

台盤所の壺に雪の山つくられて侍りけるあしたよみ侍りける
周防内侍

あだにのみつもりし雪のいかにして雲にかかるとなりけむ

(続拾遺和歌集・巻第六・冬歌・四五八)

和歌六人党の時代、『拾遺集』から『後拾遺集』にかけての時代にも雪の山の遊びは多く催されたようである。ここでは「台盤所だいばんしょの壺つぼ」に雪の山を作ったようである。女房達、またその周囲の人々で雪の山の遊びに興じたのであろう。

平安中期から平安後期にかけての文化人たちは雪の山の遊びに興じていた。それは個で楽しむものではなく集団で楽しむ遊びであった。それは集団によって享受されていた、サロンと深く関わった文化であると言え換えても良いかもしれない。そしてその雪の山は庭に作られる場合、中々の大きさのものであった。

ここまで挙げた歌はすべて庭、もしくは中庭に作られた雪の山を詠んだものである。雪の山の遊びであるので、歌でも「山」が詠まれているのである。しかし具平親王の歌では「ゆきげのやま」と山を詠んではいるが、それだけではなく詞書には「しまもみえずなりければ」、歌にも「おちのしまぐ」と島をも詠んでいるのである。しかも「しまぐ」とあることから複数であることが理解できる。庭に作られた雪の山であるならば、大きさも中々のものであった可能性が高く、複数作るのは難しいのではないだろうか。では庭以外に雪の山を作ることはいったいだろうか。また雪の山を島と表現することはあったのだろうか。次節で検討する。

三 雪の山と洲浜と島

本節では雪の山は庭以外に作られることはあったのか、また庭以外に雪の山を作る場合、どこにどのように作ったのかを検討する。

前掲『枕草子』の記事には「雪いみじう降りたるを、女官どもなどして、縁えんにいとおほく置く」とある。縁にたくさん置かれたものは

続く部分から理解できる。「同じくは、庭にまことの山を作らせはべらむ」と縁に雪を積んで山のようなものを作っていたところ、どうせならば庭に本物の山のように大きな雪の山を作らせようとした。この縁に作られたものは小型の雪の山だと考えられる。では小型の雪の山を作ることは当時一般的になされていたのだろうか。具平親王と同時代人である平祐拳すけゆかりに注目すべき歌が見られる。

同 (祐拳注)

ふりにけるゆきのしまなるむすび松とくこそ人の見るべかりけれ

此歌家集云、中務丞雪をしまのかたに造りていはたて、日かげをこけのかたにおほして松などあるを、弘徽殿こうきでんの台盤だいばん所にいれたりけるをよめると云云

(夫木和歌抄・巻第廿九・一三八一〇)

道長の家司であった祐拳は長和五年(一〇一六)の生存が『小右記』に確認できる。祐拳の家集は現在は散佚しているが、『実隆公記』によると三条西実隆は平祐拳の家集を所持していたことが知られ、室町時代までは祐拳の家集は存在していたことがわかる。⁽²¹⁾『夫木和歌抄』の左注によると、雪を島の形に造り巖をたて、日蔭の鬘を苔の形に生えさせ、松を植えたものを、弘徽殿こうきでんの台盤だいばん所しょに入れた際に詠まれた歌のようである。では室内観賞用として「弘徽殿の台盤所」に入れることのできる小型のものであった「雪をしまのかたに造りていはたて」なものとはどのようなものだったのだろうか。

『万葉集』巻第十九に祐拳の歌とよく似た歌が残されている。

天平勝宝三年

新あらたしき年とし之初はじめ者いやし 弥年やとし尔し 雪踏平ゆきふみならし之 常如此尔毛我つねかくにもが

(四二五三／四二二九)

右の一首の歌は、正月二日、守の館に集宴せしに、時に零る雪殊に多く、積むこと四尺有りき。即ち主人大伴宿禰家持この歌を作りき。

落雪乎 腰尔奈都美豆 参来之 印毛有香 年之初尔

(四二五四／四二二〇)

右の一首は、三日に介内藏忌寸繩磨の館に会集して宴樂せし時に、大伴宿禰家持の作りしものなり。

時に積雪をもつて重嶽の起てるを彫り成し、奇巧をもつて草樹の花を綵り発く。これに属して掾久米朝臣広繩の作り

し歌一首

奈泥之故波 秋咲物乎 君宅之 雪巖尔 左家理家流可母

(四二五五／四二二二)

遊行女婦蒲生娘子の歌一首

雪嶋 巖尔殖有 奈泥之故波 千世尔開奴可 君之挿頭尔

(四二五六／四二二三)

ここに諸人酒酣にして更深く鶏鳴く。これに因りて

主人内藏伊美吉繩磨の作りし歌一首

打羽振 鶏者鳴等母 如此許 零敷雪尔 君伊麻左米也母

(四二五七／四二二三)

守大伴宿禰家持の和せし歌一首

鳴鶏者 弥及鳴杼 落雪之 千重尔積許皆 吾等立可氏祢

(四二五八／四二三四)

『万葉集』卷十七から卷十九は大伴家持の歌日誌と言われている。卷十九のこの部分は家持が越中守在任中の天平勝宝三年(七五一)の出来事である。正月二日に家持の館に集宴が催された。その時

大雪が降り四尺も積もったようである。翌日三日は「介内藏忌寸繩磨」の館で宴が催され、その際に庭に雪を積み巖を模した。そこにまでしこの花を彫り成した。そのような場で詠み交わされた歌である。越中国ならではの大雪とそれに伴う遊びと言えよう。その贈答の内、「遊行女婦蒲生娘子」の詠んだ歌に「雪嶋」という表現が見える。従来このシマは「山齋」と漢字表記される泉水・築山などがある庭園のことだと解釈され、この「雪嶋」も雪で造った庭園、雪の庭園などと考えられてきた。²³⁾ その中で歌人の土屋文明は『万葉集私注』において早くに平安期の島台への類似を指摘している。²⁴⁾

作り物の景色を指すので、後世の島台などのシマに宛るのである。言葉の由来は庭園のシマであらうが、この適用は少し異なる。従つてイハは前にユキノイハホとあつたに同じである。此の時代既に島台類似のものを用ゐたらしい趣は、下の(四二五六)の「島山にあかる橘」にも見られるやうに思ふ。

庭と台の上という違いはあるが、想像上の景物、蓬萊山などの神仙的景物を形作るということは共通している。近年でも小林春美氏が「雪嶋」の「嶋」を「シマ(山齋)」の庭園と捉えることに異を唱えている。²⁵⁾ 小林氏は『懐風藻』の漢詩における「山齋」の用例を挙げ、「山齋」が詠まれる時それは普通の庭園ではなく「塵外」や「山水」であり仙境であるとする。そして越中での家持の雪の宴について、

越中の雪の宴は、雪を巖に造形し、その造形された景を見ることによつて歌が詠まれていく。「雪の島」とあるため庭園と理解されているが、「重巖」に象徴されるように、これは庭園ではなく「巖」そのものなのである。

と述べられている。そして「雪嶋」は単なる雪景色の庭園ではなく、雪を重ねて人工的に「巖」を作ったものであり、これは平安期の洲浜、またその洲浜を前にして歌を詠むことの前史に位置づけられるとしている。この「雪嶋」は「山齋」と表記されていないことも考えると庭園ではなく「巖」そのもの、もしくは「嶋」そのものであると考えるべきであろう。

祐拳歌はまさに『万葉集』における家持圏の「雪嶋」が洲浜として小型化され、室内觀賞用に変化していることを表すものと言えるだろう。『天木和歌抄』左注の「雪をしまのかた造りてにはたて」という表現は、『万葉集』詞書「積雪をもつて重巖の起てるを彫り成し」という表現と非常に似ている。「雪をしまのかたに造りていはたて」たそれは、洲浜と同様のものと考えられるだろう。祐拳の歌には「雪の山」という表現は見られず、この洲浜が当時流行の庭に作る「雪の山」と同じものだという認識であったとは判断できない。しかし雪を用いて山や島を形作る洲浜状のものがあつたことは確かである。そして具平親王、平祐拳より少し後代になるが、源経信母に箱の蓋に雪山を作つた際の歌が見られる。

十二月の晦に、箱の蓋に雪山をつくりて、つもりにけりといふに

ふりおほふはこねの山のしらゆきもはるのあけばやいかにとぞおもふ
(経信母集・一四)

これははつきりと「雪山をつく」つたと記されている。箱の蓋に雪山を造つたため、「はこねの山のしらゆき」を詠んだ歌である。これはまさに洲浜としての雪の山と言えるだろう。

『万葉集』の「雪嶋」は庭に作られたものの、祐拳の「ゆきのしま」は洲浜に作られたものであつたことを確認した。しかし「ゆきのし

ま」がはつきりと雪の山の遊びを指して詠まれた歌は見られない。「ゆきのしま」は地名の壹岐島を指して詠まれるか、そこにただ「雪」を掛けて詠まれることしかされなかった。⁽²⁶⁾そして具平親王詠も「ゆきのしま」と表現している訳ではない。具平親王が「しまもみえずなりければ」「おちのしまぐ」と詠んだのは、「わたつみ」の縁で雪の山を「しまぐ」と見立てたのだと言えよう。では具平親王詠の詞書で「やうく〜とけてしまもみえずなりければ」と記された雪の山、「おちのしまぐ〜みえずなりゆく」と詠まれた雪の山は庭に作られたものであつたのか、洲浜であつたのか。溶けゆく様が目に見えていることを考えると、洲浜として室内に作つた小さな雪の山であつたと言えるだろう。洲浜として作られた雪の山であるとしても、それは庭に作られた雪の山と同じく集団で享受されたものだと考えられる。洲浜を前に数人で歌を詠み合う、そういった様子⁽²⁷⁾が想像されるのではないだろうか。また「ゆきげのやまぞまさるらし」という表現からも盆や箱の蓋などに作られた洲浜状の雪の山であつた可能性が高いと言える。この点について次節で検討する。

四 「ゆきげのやまぞまさるらし」として表現すること

雪の山の遊び、また雪の山の洲浜化、「しま(しまぐ)」という表現について確認してきた。本節では「ゆきげのやまぞまさるらし」という表現について検討する。この歌い方は一見意味が取りづらい。何を表現しているのだろうか。

和歌における「ゆきげ」とは古くは「雪消」であり、雪解けを表す。古く『万葉集』に、「⁽²⁸⁾きみがなめ やまだのさばに 恵具探跡 雪消之水尔⁽²⁹⁾裳裾所沾」(巻第十・春雑歌・一八四三／一八三九)という歌が見える。雪解けを意味するのだから「ゆきげのみづ」と表現されることが多い。雪解けであるので季節は初春が普通である。平安後期になると「雪気」の意味で使われる場合も出てくるが、具平親王詠は

「雪消」の意味であろう。「ゆきげのやま」という表現は具平親王以前には見られない。時代が下って鎌倉以降「雪氣」の意味での「ゆきげのやま」が少し詠まれているのみである。「ゆきげのやま」を文字通り解釈すると、「積もっていた雪が溶けた山（雪解けの山）」という意味になるだろう。しかし詞書に「やうく／＼とけて、しまもみえずなりければ」や、下の句「おちのしまく／＼みえずなりゆく」とあることを踏まえると、「溶けてなくなってしまうた雪の山（島）」と考えるべきである。「ゆきげのやま」という表現は具平親王以前にはないが、「ゆきげのみづ」という表現は古くに見られる。先に挙げた『万葉集』の歌がそうであるし、また『古今集』に具平親王詠とよく似た表現の歌を見つけることができる。

題しらず

読人しらず

この河にもみちば流るおく山の雪げの水ぞ今まさるらし

（古今和歌集・巻第六・冬歌・三三〇）

「おく山の雪げの水ぞ今まさるらし」と雪解けによって奥山から流れる河の水量が増しているらしい、と詠んでいる。『万葉集』や『古今和歌六帖』の歌では「ゆきげ（雪消）」は春の景物であった（注（27）参照）。しかしこの『古今集』では冬の歌として採られている。さらに「まさるらし」と詠まれる歌を調べてみると、『古今集』歌と同じくほとんどが水量が増す、という意味で詠まれている。順に見てゆこう。

春さめによには水こそまさるらしはたたきこゑおとたかくなる
（30）
（人丸集・山陰道・たば・二七二）

『人丸集』の歌は春雨によって水が増していることを詠んでいる。

また『後撰和歌集』には、天の川について詠んだ歌が見える。

あまの河水まさるらし夏の夜は流るる月のよどむまもなし

（巻第四・夏・題しらず・二二〇）

夏の夜が短く月が早く流れてゆくことの原因を天の川の水量が増えているらしい、と詠んでいる。『中務集』にも同じく天の川の水量が増すという歌が見える。

たなばた
七夕の絵あるに

さよふけて今日わたるらんあまのがはかけこそみえぬみづまさるらし
（一一三）

七夕の絵を見て詠まれたものである。七月七日に牽牛織女が天の川を渡っているだろう、その姿が見えないのは天の川の水嵩が増しているかららしい、という歌である。『続後撰和歌集』にも醍醐天皇詠として天の川の水がまさる、という歌が見える。

八日のあしたよませ給うける
延喜御製

ひこぼしのわかれてのちの天のがはをしむなみに水まさるらし
（巻第五・秋歌上・二六一）

彦星との別れを惜しんで流した織姫の涙によって天の川の水嵩が増しているらしい、とこれも七夕詠である。『後撰集』二一〇番歌の影響か「水」が「まさるらし」と詠む場合、七夕詠がほとんどである。そしてそれは水（河）の水量が増す、という意味で詠まれている。少し時代は下るが能因は七夕ではない「水まさるらし」という歌を詠んでいる。

ゆふだち
なるかみのゆふだちにこそあめはふれみたらし川の水まさるら
し
(能因法師集・下巻・二五六)

「ゆふだち」題なので夏の歌である。夕立によって「みたらし川」の水量が増しているらしい、と詠んだ歌である。

「水」が「まさるらし」と詠まれる場合、『万葉集』は春の雪解けの水によって沢の水量が増す歌、『古今集』三二〇番は冬の雪解けによって河の水量が増す歌、『人丸集』は春雨によって水量が増す歌であった。また『後撰集』二二〇歌を始めとして七夕の天の河の水量が増す、という詠まれ方もっとも多いことが判明した。しかし具平親王詠は『拾遺集』の配列から見ても、雪の降った時の冬の歌である。参考歌として重要なのは『古今集』三二〇番歌である。

しかしその古今集歌も「雪げの水ぞ今まさるらし」という表現である。たしかに具平親王の「ゆきげのやまぞまさるらし」では意味がとりにくい。当時の人々も解釈に苦労したのであろう、故に『拾遺集』に採られる際、「ゆきげの水はまさりけり」と改変されたと考えられる。『拾遺集』の本文は雪解け水が増えた、とわかりやすい表現になっている。しかし別系統の『具平親王集』があったにせよ、寂然筆系統の『具平親王集』の歌を改変して収めたにせよ、この具平親王詠は断簡の表現のまま解釈するべきである。具平親王詠は第一の解釈として水量が増しているらしい、という意味を汲み取るべきである。

ではその水量が増しているらしい、とはどのような情景なのであろうか。それは前節で取り上げた洲浜と関係している。盆や洲浜に作られた小型の雪の山、それは「わたつみ」の縁で「おちのしまぐ」と表現された。その「しまぐ」が時間が経つにつれて溶けてゆく。それによって「しまぐ」を載せていた盆から水があふれ

出し、それを「わたつみ」に見立てたのである。雪の山の溶けた水によって水嵩が増すという表現は庭に作られた雪の山ではあり得ない。この点からも当該歌は洲浜を前にして詠まれたものであると言えるだろう。

それでは水量が増す、という意味ではない「水」が「まさるらし」という詠まれ方であったのであるうか。公任の歌を見てみよう。水量が増す、という意味だけではない「水」が「まさるらし」の歌である。

大殿のみもとにて秋の日あそびくらしして

秋のよは水こそことにまさるらし月と露とのもるにまかせて

(公任集・一〇七)

大殿（藤原道長）邸にて秋の日に一日中管絃の遊びをした時の歌である。この歌における「水こそことにまさるらし」という表現は、道長邸の池（水）の風情が「ことに」（殊に）に「琴に」を掛ける（勝っているらしい、また木の間から漏れる月光、葉から漏れる露によって水嵩も増しているらしい、という歌である。道長邸の池の風情を（すなわち道長自身を）賞賛した歌と言えよう。³¹）これまでの定型を捻った表現である。

具平親王詠では第一に「水嵩が増す」という解釈をするべきである。しかし公任詠で見たように「まさるらし」には優れている、勝っているという意味もある。具平親王詠にもその意味を汲み取るべきである。

五 一首の解釈

これまでの検討と解釈のまとめをする。まず大意を示す。

暮れ方になつたので、だんだん溶けて、(雪の) 島も見えなくなつたので、人々の詠んだ歌に(和してお詠みなさつた歌)

海は雪解けの山の水が増えているらしい。遠くの島々がだんだん見えなくなつてゆく。

このようになるだろう。箱の蓋や盆に雪の山を作り、皆で眺めて歌を詠み合つたのであろう。その雪の山がだんだんと溶けて、小さくなり盆に水が溢れるようになった。その溢れた水を「わたつみ」に見立て、その縁で小さくなつた雪の山を「おちのしまぐ」と島に見立てたのである。本来は雪の山が溶けて小さくなり、その溶けた水が溢れる。しかし「わたつみ」の水嵩が増えたことによつて島が小さくなつた。その様を遠くの島々が小さく見えなくなつてゆく景に見立てたのである。しかしそれだけでなく「ゆきぎのやまぞまさるらし」という表現は、海に見立てた洲浜の景が優れたものであるという意味も汲み取るべきではないだろうか。室内に造つた雪の山、雪の島々、それは小さな洲浜であるが壮大な「わたつみ」に見立てられた。そのギャップがこの歌のおもしろみではないだろうか。

ここで詳しく触れていなかった「おちのしまぐみえずなりゆく」という表現について確認しておこう。「おち」は歴史的仮名遣も定家仮名遣も「をち」である。しかし寂然筆断簡は私家集の断簡である。書き間違い、表記のゆれということもあり得るだろう。当該歌も『拾遺集』では「をち」となっている。問題は「をちのしま」という表現が具平親王以前に見られないということである。同時代、高遠の歌に「をちのしまね」という表現が見られるのみである。

しまのほとりに、ふねさしいづ

いくくもゐるすぎてゆくらんふくかぜにをちのしまねをつたふう
き舟 (大式高遠集・三二)

遠くの島々というよく歌に詠まれそうな表現ではあるが、「おちのしまぐ」とは当時新しい表現であつた。

また当該歌に続く詞書「あなみぐるしく、これをも」について述べておく。断簡がここで途切れているので「これをも」の続きは残念ながら不明である。ただ「あなみぐるし」という表現は、雪の山の島々が溶けてゆく景に対して、また自身の歌に対しての評価であると言えるのではないだろうか。折角のすばらしい海に見立てた洲浜の景が溶けて見えなくなつてしまうことが「あなみぐるしく」なのである。また自身の歌、雪の山が溶けた水を見立て、雪の山が溶けた上に水かさが増して見えなくなるといふ景を、あたかも海の遠くに島々が見えなくなつてゆくといふ雄大な景に見立てたことに対する評なのである。洲浜の雪の山という小さな空間を雄大な自然の景に見立てたギャップ、滑稽みを帯びた見立てに対する「あなみぐるしく」なのである。

おわりに

最後に勅撰集撰集資料としての『具平親王集』について触れておく。冒頭で述べたように本稿で取り上げた歌は『拾遺和歌集』巻第十七に「雪をしまじまのかたにつくりて見侍りけるに、やうやうきえ侍りければ」という詞書で入集している。この歌は公任撰の『拾遺抄』には見られない。すなわち花山院、もしくはその周辺の人物によつて『拾遺和歌集』撰集の最終段階で増補された歌だと言える。現存している寂然筆系統ではない『具平親王集』が存在し、それを撰集資料としたとも考えられる。しかし寂然筆断簡しか現存していないことを考えると、寂然筆断簡系統の『具平親王集』が撰集

資料であった可能性が高いと言えるだろう。そこから二首並び取って『拾遺和歌集』に収めたのではないだろうか。

具平親王の歌一首を検討してきた。本稿で取り上げた歌は、洲浜として小型化された雪の山、それを前にしての滑稽みを帯びた見立てによる歌であった。この洲浜と広大な海の見立ては他には見られない。具平親王独自のものである。一首だけで結論は出すことはできないが、本稿で取り上げた歌のように、滑稽な見立てや表現、日常の歌というものが他にもあるはずである。また私家集ならではの歌、具平親王サロンとでも言うべき、集団としての歌があるのではないだろうか。⁽³²⁾ 研究を積み重ねてゆく必要があるだろう。

本稿で取り上げた『万葉集』の家持圏の歌、その歌を具平親王が知っていたかははっきりとはわからない。しかし上覚の『和歌色葉』に『古今和歌六帖』の撰者と目されていたこともあった具平親王である。⁽³³⁾ 『万葉集』によく通じていた可能性を考えるべきである。本稿の歌では具平親王と『万葉集』の直接的な関係は証明することができなかった。しかし具平親王だけでなくこの平安中期、『拾遺和歌集』前夜とでも言える時代に、新たな表現を求めて万葉調の、もしくは『万葉集』の表現を借りて歌を詠むということがなされていた可能性を検討すべきである。今後の課題としたい。

*しまだ りょう

文学研究科国文学専攻博士課程後期課程
二〇一七年一〇月四日 査読審査終了

註

- (1) 「所謂、伝寂然筆自家集切」は具平親王集の断簡か。『和歌文学研究』第二十二号、和歌文学会編、昭和四十三年一月。また、なぜ「伝寂然筆」ではなく「寂然筆」とされるのか、それは同論文に報告された資料により明らかとなる。萩谷氏は藤原定家の奥書を紹介され、それには「唯心房寂然壹岐守頼業少年之時狂手跡也」とある（注(4)参照）。定家が寂然の筆跡であると判断したことから「伝寂然

筆」ではなく寂然真筆だと言える。

- (2) 久保木秀夫「大富切補遺」（鶴見日本文学会報）六九号、鶴見日本文学会、平成二十三年十月、矢澤由紀「伝寂然筆「具平親王集（中務親王集）」の newly 資料」（中央大学国文）五七号、中央大学国文学会、平成二十六年三月）など。

- (3) 字配り、清濁の別は萩谷氏の論文による。歌に付された番号(F)は萩谷氏による番号である。各断簡をわかりやすくする為、私に各断簡の範囲を枠で示した。

- (4) 萩谷氏は「丙（田中家蔵残簡）」として六葉を紹介している。ペーJの都合上、本文に載せられなかった残りの断簡四葉の内容をここに紹介する。

ゆきのふるひてすさびにかしらしろきをむなわかなつみた
るかたをつくらせ給て

としをへてわかかなをつむとせしほどにかしらのゆきにふりにけ
るかな（第一葉）

ものかくとおもひてしつけ、たる

いそぐくれあまのすさびにかきすつるか、るもくづを人かへさ
なむ（第四葉）

唯心房寂然壹岐守頼業少年之時狂手跡也（以上第五葉定家奥書
加奥書墨付五丁代々令秘蔵者也（以上第六葉兼良奥書）

これらは「私家集大成」（注(5)参照）に全て収められている。しかし第四葉詞書は「私家集大成」は「ものかくとおもひて、しつけ、たる」と歎」としているが、萩谷氏の翻刻を見ると「と歎」は「しつけ、たる」の傍書である可能性が高い。また「養老集」所収の断簡には、

〔 上句欠 〕 〔 さらにしらするけさのはつ
ゆき

とあるを御覧して
もとゆひにふりそふゆきのしづくには 〔 下句欠

〕とあり、影印が「古筆学大成」（注(7)参照）に収録されている。酒井宇吉蔵の断簡には、

「上句欠」 「うらこかるねにうくひすの
なく

あるいろこのみたつ人のもとに、まつたけをあきかみにつ、
みて、すみをきかきつけて

おもひやるふもとの、へのふちはかまやまのしづくに「結句
欠」

という歌が書かれていたようであるが現在所蔵不明である。この両
断簡の歌も『私家集大成』に「具平親王・中務親王集」として収録
されている。

(5) 『新編私家集大成』は株式会社古典ライブラリー「日本文学」
図書館」版を用いた。以下同様。本文中の「閉じ括弧」は、断簡の
終わりを示している。

(6) 以下、特に断りのない和歌の用例は『新編国歌大観』（古典ライ
ブラリー「日本文学」図書館「版」）による。引用の際、読みやすく
するため仮名を漢字に改めた部分がある。その場合、ルビとしても
との仮名表記を残した。また歌の終わりに（ ）で新編国歌大観番
号を示した。

(7) 小松茂美『古筆学大成 第十九巻 私家集三』講談社、一九九二
年六月

(8) 『拾遺和歌集』『雑春』『雑秋』については早くに堀部正三氏が、『拾
遺抄』の「雑上」「雑下」から分化展開した一部であり、その中に
「雑夏」「雑冬」が含まれることを指摘されている（『拾遺抄及び拾遺
集の成立に就いての考察』。「中古日本文学の研究」資料と実証」
収録、教育図書株式会社、昭和十八年一月）。また島田良二氏は、『拾
遺集』の雑部について、四季の部と異なり生活に関連した歌、自己
の感懐を込めた歌が多いとされる（『八代集の雑歌について』、『平安
前期私家集の研究』収録、桜楓社、昭和四十三年四月。初出は『国
語と国文学』昭和三十九年一月号、東京大学国語国文学会。しかし
本稿で重要なのは「雑秋」に収められているが冬の歌である、とい
う点である。

(9) 第八三段「職の御曹司におはしますころ、西の廂に」。『新編日本
古典文学全集18 枕草子』（松尾聰・永井和子校注・訳、小学館、一

九九七年一月）による。

(10) 『紫明抄・河海抄』玉上琢彌編、山本利達・石田穰二校訂、角川書
店、昭和四十三年六月。なおこの記事は『増補史料大成1 歴代宸
記』（増補史料大成刊行会編、臨川書店、昭和四十年九月）に収録さ
れる『村上天皇御記』には見えない。

(11) 『増補史料大成 別巻 小右記二』増補史料大成刊行会編、臨川書
店、昭和四十年九月。通行の字体に改めた。また訓読に際して『現
代語訳 小右記1』（倉本一宏編、吉川弘文館、二〇一五年十月）を
参照した。

(12) 『増補史料大成9 中右記二』増補史料大成刊行会編、臨川書店、
昭和四十年九月。

(13) 『増補史料大成 台記一』増補史料大成刊行会編、臨川書店、昭和
四十年九月。

(14) 「ゆきより」が橘行資のことであろうという考察は、竹鼻績『私家
集注釈叢刊15 公任集注釈』（貴重本刊行会、平成十六年十月）によ
る。以下、『公任集』の解釈に関しては、同書を参考とした。

(15) 竹鼻氏は前掲書（注（14）参照）において、春日祭のころに大雪
の降った年を検討し寛弘元年（長保六年、一〇〇四年）二月六日の
贈答である可能性が高いとされている。

(16) 藤原清輔の『袋草紙』に逸話が見える（『新日本古典文学大系29
袋草紙』による。藤岡忠美校注、岩波書店、一九九五年一〇月）。上
巻に次のようにある。

朗詠の江注に云はく、四条大納言、六条宮に談ぜられて云は
く、「貫之は歌仙なり」と。宮曰はく、「人丸には及ぶべからず」
と。納言曰はく、「然るべからず」と。ここに秀歌十首を書き
て、後日に合はせらる。八首は人丸勝ち、一首は貫之の勝つ。「こ
の歌持なり」と云々。なつのよのふすかとすれば子規。この事
より起りて卅六人撰の出来せるか。件の撰不審有り。いはゆる、
深養父・元方・千里・定文等、これに入らず。この人々、あに
頼基・仲文・元真等の類に劣らんや。（後略）

(17) 『新注和歌文学叢書19 範永集新注』（久保木哲夫・加藤静子・平
安私家集研究会著、青簡舎、二〇一六年三月）による。解釈の参考

とした。

- (18) 『私家集全釈叢書21 橘為仲朝臣集全釈』(好村友江・中嶋眞理子・目加田さくを著、風間書房、平成十年四月)を参考とした。また同書にも指摘されているが、康資王母(筑前)も共に居たらしく、下野の末の句に本の句を付けている。こちらは竈山ではなく煙の立つ富士山を詠んでいる。

ひたき屋に雪のつもりたるを、宮の下野

いかでかつもる火たきやの雪

といへば

- (19) 『周防内侍集』には初句、下句が異なる形で収められている。

正月晦、大盤所の壺に、雪の山つくらせたまへるに、人人う
たよむに

あめにのみつもりしゆきのいかにしてくもぬにかへる山となるら
ん(四)

- (20) 『小右記』長和五年五月十八日条(『増補史料大成 別巻 小右記 二』)による。増補史料大成刊行会編、臨川書店、昭和四十年九月)に、「四位資平、長経、経任、(中略)祐拳、(中略)立ちながら清談す。」(原漢文)とある。

- (21) 『実隆公記』別記「室町第和歌打聞文明十五年七月至十一月」(東京大学史料編纂所蔵)の文明十五年(一四八三)八月十四日記事に『祐拳集』についての記述がある。

十四日、甲戌、(中略)今日、予、撰じ見し分、

大藏卿行宗集 範永朝臣 惟宗廣言 惟成 爲頼 平祐擧
藤原輔相 藤親盛「秋部に至る、未だ終功せず。」(原漢文)

とあり、平祐拳の家集だけでなく、源行宗、藤原範永、惟宗広言、藤原為頼、藤原輔相(藤六)、藤原親盛の家集も見ていたようである。『実隆公記 卷九』(高橋隆三編、統群書類従完成会、昭和四十二年五月)による。

- (22) 『万葉集』の引用は『新編国歌大観』によるが、底本である西本願寺本の旧訓は省略し、現代の新訓をルビで示した。また歌番号に関しては、(新編国歌大観番号/旧国歌大観番号)と新旧両方の番号を

付した。なお詞書・左注の訓読に『新日本古典文学大系 4 万葉集 四』(佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注、岩波書店、二〇〇三年十月)を参照した。

- (23) 『万葉集』における「山斎」の表記は歌で一件、詞書で一件確認できる。

与妹為而 二作之 吾山斎者 木高繁 成家留鴨(卷第三・挽

歌 四四五/四五二)

属目山斎 作歌三首(卷第二十・四五三五/四五一一~四五三

七/四五一三、詞書)

- (24) 土屋文明『万葉集私注 九 新訂版』(筑摩書房、昭和五十二年七月)による。引用の際、漢字は通行の字体に改めた。

- (25) 小林春美『洲浜の造形―越中の雪の島から』(國學院大學大学院文学研究科論集 三二号、國學院大學大学院文学研究科学生会、二〇〇五年三月)

- (26) 「ゆきのしま」の古い用例は『万葉集』巻第十五の三七八/三六九六番歌、天平八年(七三六)の遣新羅使一行の雪連宅満が病没した際に六鯖が詠んだ挽歌に「由吉能之麻」とある。しかしこれは地名の老岐島を詠んだ例である。老岐島は古くは「ゆきのしま」と呼ばれていたことは二十巻本『和名類聚抄』から知られる。『古写本和名類聚抄集成 第三部 二十巻本系諸本の影印対照』(馬淵和夫編、勉誠出版、平成二十年八月)によると天正本(大東急記念文庫蔵、室町中期書写)巻五14丁オ「西海道國第五十九」に「壹岐島由岐、また元和古活字本巻五10丁オ「西海道第五十九」に「壹岐島由岐」と見られる。また「ゆきのしま」に「雪」を掛けて詠まれるようになるのは平安中期まで下る。確実な用例として早いものは大斎院選子内親王サロンで詠まれた歌である。

十日、雪のいと高う降りたるに、馬

あらたまるかひこそなけれふる雪をはるひうらうらあまは(一)

さい将

うらうらをはらひてらすはしろたへのゆきのしまなるあまにや
しるらむ(大斎院前の御集・八、九)

雪がたいそう高く降り積もった景を前にして「しろたへの雪」を詠

み、そこに同音の「壹岐」を掛け「壹岐の島なる海女」を詠んだ歌である。

- (27) この歌は広く人口に膾炙したようで、『赤人集』『家持集』には結句「もすそぬらしつ」として載る(『赤人集』一三八番、『家持集』六一番)。また『後撰和歌集』にも「題しらず」として、「君がため山田のさにはゑぐつむとぬれにし袖は今もかわかず」(巻第一・春上・三七)という歌が採られている。また『古今和歌六帖』にも、「きみがためやまだのさにはゑぐつむとぬれにし袖はほせどかわかず」(第三・さは・一七二九)、「あしひきの山田のさにはゑぐつむとゆきげの水にもすそぬらす」(第六・ゑぐ・三九二三)と似た形で二首残っている。

- (28) いくつか例を挙げると、「晴れやらぬ雪げの山のご雲やかすめる空のはじめなるらむ」(東撰和歌六帖・第一・春・早春・八、平政村朝臣)、「とひわぶるけぶりの末もはてぞなき雪げの山のおくのゆふぐれ」(歌枕名寄・未勘国上・雪気山・九二七五、兵衛)などである。
- (29) 「水」が「まさるらし」以外の「まさるらし」の歌として清原元輔、大中臣能宣の歌が挙げられる。

あまつかぜにたぐふこのはのちりつめばときはの山ぞかずまさるらし (元輔集・三三三)

あきぎりのみねにもをにもたつた山もみちのにしきたままさるらし (能宣集・五〇)

能宣の歌は正保版本「歌仙家集」本では結句が「たまはまさるらし」となっており本文が安定しない(『新編私家集大成』による)。具平親王以前では、「水」を伴わない「まさるらし」の歌はこの二例のみである。梨壺の五人として共に活躍した二人である。この時代「水」ではないものを「まさるらし」と詠もうと試みられたのかもしれない。

また具平親王以降の「まさるらし」の歌を二首挙げておく。

俊忠卿家歌合にさみだれの心をよめる 藤原顕仲朝臣

さみだれにみづまさるらしさはだがはまきのつきはしうきぬばかりに (金葉和歌集初度本・巻第二・夏・二〇二)

みなかみに花さきぬればぬのびきのたきのしらいとかさまさるらし

(為忠家後度百首・桜甘首・滝上桜・勘解由次官親隆・八二二) 顕仲歌では「みづ」、親隆歌では直接「水」とは詠んでいないが「たきのしらい」と水を表している。やはり「まさるらし」と詠む場合、水量が増すという詠まれ方がほとんどと言えらるだろう。

- (30) 『私家集全釈叢書』4 人麿集全釈(烏田良二著、私家集全釈叢書刊行会、風間書房、二〇〇四年九月)によるとこの国名の隠題歌群は第四次増補であり、人麿詠ではないとする。また伝本により異同があり烏田氏による校訂本文を掲げておく。

たには

春さめにたには水こそまさるらし たにはたゞにおとたかくな

- (31) 竹鼻績氏前掲書(注(14)参照)を参考とした。

- (32) 見立ての歌ではないが、具平親王には「あるいろこのみたつ人」に、「まつたけ」を贈った際の、「おもひやるふもとの、へのふちかま やまのしづくに」(第五句不明、『私家集大成』番号四)という歌が見られる。贈答としての松茸、それにどのような意味が込められているのか、興味深い歌である。

- (33) 『和歌色葉』(『日本歌学大系 第参卷』佐佐木信綱編、風間書房、昭和三十一年十二月)「撰抄時代」に「私の打聞髓脳口伝物語思々におのくやうくにおほかり。憶良が類聚歌林、師氏批把天の海手古良、天神の菅家万葉集、(中略)六条宮後中の六帖」とある。順徳院の『八雲御抄』(『日本歌学大系』同前)にも記述があるが、それによると「六帖貫之或兼明親王」とあり兼明親王の名が挙げられている。この点についてはさらなる検討を要するだろう。